

## ことばによる「捉え」をめぐる\*

大藪正彦

### 1. はじめに

成田節氏の一連の論考は、例えば結合価、be-動詞、受動態などドイツ語の広範な領域を扱っているが（成田 2002, 2005, 2018 など）、通底しているのは、言語の話し手が対象や事象をどのように捉えているのかという関心であると思われる。人が世界を捉える際にことばに拠っていることは明らかである。巨視的な観点に立つならば、ことばを話すという行為は、人の適応の一部を成すと言ってよいであろう（Ickler 1984）。適応とは、生物レベルで言えば、概ね行為のための準備である。具体的には、外界の把握と、場合によっては外界へ働きかけることによって生存を確かなものにするのであり（Uexküll 1934）、人の場合は、そこにすぐれて主体的な認知の営みが介在する（池上 2019）。人の脳はまさにこの目的のためにここまで発達してきたと言えるだろう。<sup>1</sup>

Tomasello のことばを引くと、「言語記号には、先行する何世代もの人が社会集団の中で対人的コミュニケーションのために有用だと考えた、世界をカテゴリー化し、把握（*construe*<sup>2</sup>）するやり方が組み込まれている」（Tomasello 1999: 8, 訳は筆者）。言うまでもなく、同じ対象や事象であっても、人はいく通りもの異なったやり方で言語化することができる。

#### (1) Hund 〈犬〉－ Tier 〈動物〉－ Haustier 〈ペット〉－ Plage 〈害獣〉（Tomasello 2006: 20）

裏を返せば、ことばによる表現には、常に特定の視点ないし「捉え」が織り込まれていることになる。このことについて Tomasello は次のように述べる。

言語記号は特定の視点に基づく認知的表示であり、他の動物や人の乳児の場合とは異なり、直接の知覚・運動経験を記録するものではない。言語記号はむしろ、個人がいくつもの可能性の中から選択した物事の把握の仕方に基づくものである。[...] 言語記号は従って、状況の外にある物事に言及することを可能にするだけでなく [...], 知覚可能などのような状況であっても複数の表示を同時に可能にすることで、人の認知を直接知覚の状況から解放するものである。（Tomasello 1999: 9）

つまり人は、直接的に知覚される世界——浜田（1999）のことばを借りると「この身体で生きている時空世界」——とは別に、ことばによる「もう一つの時空世界」を立ち上げて生きて

\* 本研究は科学研究費助成事業の助成を受けている（課題番号 19H01250）。

<sup>1</sup> 人の場合はさらに、ことばという適応の手段が他者との協力関係に基づいて実践されているのが特徴的である。これにより、人はすべてのことをゼロから経験する必要がなく——つまり人に言わ（*sagen*）せればよく——すべてを自分で行う必要もない——つまり人に頼め（*bitten*）ばよい——という状況を作り出してきた（Ickler 1984: 12）。そのよし悪しは別として、それにより生じたのが「累進的な文化進化」（Tomasello 1999）と呼ばれる強力な文化的継承プロセスである。

<sup>2</sup> 同書のドイツ語訳（Jürgen Schröder 訳, 2006）では、*construe* や *construal* の訳語として *auffassen* や *Auffassung* が用いられている。

いる。この二つの世界の展開にことばが深く関わっているのであれば、それについて考えることは言語学の重要な課題の一つであり、同時に、人間にとってことばとは何かという問いの根本に光を当ててくれるものであると筆者は考えている。

さて、いささか話が大きくなり過ぎたが、以下本稿では、人がことばを用いて世界をどのように捉えているのかという問題について、まずは素朴に概略を描くことを目指し、言語研究や隣接領域におけるこれまでの知見をまとめ、その問題群を整理してみたい。言うまでもなく、人が一つの種である以上、世界の捉え方に個人差を超えた人としての普遍的な側面があるのは当然のことである。それは大前提として、筆者の関心の持ち方としては、個別言語ごとの傾向性ないし変動の幅という相対的側面を見極めたいということがある。従って、捉えに見られる日独語間の異同についても可能な範囲で言及していく。また、事態の捉え方と言うと、認知言語学における「事態把握<sup>3</sup>」(*construal*)——つまり、発話に先行する、話し手が事態を解釈する認知的営み——という概念がまず思い浮かぶが、本稿では、それに限らずことばによるさまざまな捉えの問題を取り上げてみるつもりである。近年の対照研究においては、とりわけ本稿の2.4節で取り上げる「視点」の問題が盛んに論じられてきた。しかし、物事の捉え方を左右する要因は視点だけではない。視点以外の要素があまり取り上げられてこなかったのは、それらが言語間の差異にそれ程関与的でないからなのか、まずは一つ一つ検証していく必要がある。その知見の積み重ねにより、ドイツ語と日本語は何が違うのかという問いに対する一つの答えが出てくるはずである。本稿をそのささやかな出発点としたい。

## 2. 事態把握 (*construal*)

まず Langacker を中心とする認知文法の分野で論じられている事態把握という概念について、ドイツ語の例を引きながら見ていく。<sup>4</sup> よく知られているのは Langacker (2008) の中の事態把握を扱った章であろう。<sup>5</sup> そこでは、事態把握を構成する主な要素として、「詳述性」(*specificity*)、「焦点化」(*focusing*)、「際立ち」(*prominence*)、「視点」(*perspective*) が取り上げられている。<sup>6</sup> 以下では、Langacker (2007) で取り上げられている「動態性」(*dynamicity*) も加え、それらを順に見ていくことにする。

### 2.1 詳述性 (*specificity*)

「詳述性<sup>7</sup>」とは、対象・事象をどの程度詳細に捉えるのかという選択である。次の例では、あとに行くほど詳細な描写がなされている。

- (2) Etwas passierte. 〈何かが起こった〉 — Eine Person sah ein Tier. 〈ある人がある動物を見た〉  
— Ein Mädchen sah ein Meerschweinchen. 〈ある女の子がモルモットを見た〉 — Ein ängstliches

<sup>3</sup> 英語の *construal* に対してはいくつかの日本語訳があるが、本稿では池上 (2020) に依拠し「事態把握」を用いる。なお、認知意味論についてドイツ語で概説している Smirnova (2020) では、*construal* に対して *Perspektivierung* 〈視点化〉というドイツ語が当てられている。

<sup>4</sup> ドイツ語の例は主に Smirnova (2020) から取った。

<sup>5</sup> Langacker (2008) の日本語訳 (山梨正明監訳, 2011) では「事態解釈」と訳されている。

<sup>6</sup> これらの術語の日本語訳にもばらつきが見られる。例えば *specificity* に対しては「細密度」、*perspective* に対しては「パースペクティブ」などの訳語も見られる。

<sup>7</sup> Smirnova (2020) では *Spezifität* というドイツ語が当てられている。

Mädchen mit roten Haaren und gelber Brille bemerkte ein krankes Meerschweinchen mit schwarzen Flecken. (黄色いメガネをかけた赤い髪の不安そうな女の子が黒いぶちのある病気のモルモットに気づいた) (Smirnova 2020: 69)<sup>8</sup>

詳述性は語のレベルでも問題になるが(例:「植物」－「花」－「バラ」), 日常的によく用いられるタクソノミー上のレベルを「基本レベル」と呼ぶことは周知の通りである。ただし, 状況によってどのレベルの語が選ばれるのかということが変動することがある。例えば専門語の状況を考えてみよう。<sup>9</sup> 専門語に対する批判として「抽象的過ぎてよく分からない」というものがあるが, これは当たっているだろうか。抽象度のレベルというのは本来, より一般的な概念か, より特殊な概念か——つまり「植物」か「バラ」か——という違いの話である。従って *Prüfspannung* (試験電圧) や *Kontaktnetzspannung* (通信網電圧) などが「抽象的」であるという批判は当たらない。むしろ「具体的」である。もちろん, より抽象度の高い語が選択される場合もある。例えば法律の世界では, 日常的には *Werkzeug* (道具), *Kiste* (箱) という語が用いられるような状況で, *Gerät* (器具), *Behälter* (容器) が用いられる(そしてそれには法律上の理由がある)。つまり, 一般語と専門語では詳述性(ここでは抽象性と置き換えてよい)の選択の原理が異なっており, それが専門語の「取っ付きにくさ」の原因の一つになっているというわけである。

詳述性に関して, 日独語間に一般化できるような異同が認められるかは現時点では不明だが, 個別的な違いが見出されることはある。

- (3) a. 『掏摸(スリ)』(中村文則氏による小説のタイトル)
- b. *Der Dieb* (どろぼう) (Th. Eggenberg 訳)<sup>10</sup>

しかし, これが捉えの相違に帰すことのできる問題なのか, あるいは個別言語における語義の問題なのかは, 注意深く検討する必要があるだろう。

## 2.2 焦点化 (focusing)

「焦点化<sup>11</sup>」は, 事態を構成する要素の何を取り上げ, 何を取り上げないのかという選択のことである。何かを取り上げれば, その周囲のものは背景に退く。例えば *Ellenbogen* (肘) という場合は *Arm* (腕) が背景化され, さらに *Arm* (腕) は *menschlicher Körper* (人体) を背景化する。知覚心理学の術語を引き継ぎ, 「図」(*Figur*) と「地」(*Grund*) という言い方も用いられるが, とりわけよく知られているのは Talmy による分析であろう (Talmy 2000)。詳述はしないが, 人の知覚の特性を反映し, 図として把握されやすいもの, 地として把握されやすいもの, それぞれの特徴がある。また, 図・地の分化は具体的な空間だけでなく, 比喩的な解釈を通して, 次の例のように他の領域にも拡張されると考えられている。

<sup>8</sup> 引用に際し誤植を訂正した。

<sup>9</sup> 本節の専門語の例は Ickler (1997) から取った。

<sup>10</sup> ちなみに先行する英語訳では *The Thief*, フランス語訳では *Pickpocket* と訳されている。

<sup>11</sup> Smirnova (2020) は Langacker (2007) に依拠している関係で, 焦点化は取り上げていない。ただし, Talmy (2000) による図・地分化の問題が別途取り上げられており, 本節ではその部分の用例を採用した。なお, Langacker 自身は, 焦点化は次節で通り上げる際立ちの一種であると述べている (Langacker 2008: 66)。

(4) Ich träumte, während ich schlief. 〈眠っている間に [地] 私は夢を見た [図]〉 (Smirnova 2000: 68)

もちろん図・地の対立が明確でない状況も十分にあり得る。そうすると、図・地の反転が起こりやすくなる。対照研究との関連で興味深いのは、この反転の生じやすさに言語間の相違があるのではないかという点である。

- (5) a. Im Schrank hängen viele Kleider. 〈たんすの中には服がたくさん掛かっている〉  
b. Der Schrank hängt voller Kleider. 〈\*たんすは服でいっぱい掛かっている〉

上例では、場所とその場所を占めている物を表す項との間で交替が生じている。この場合、日本語では同じ動詞での交替は難しい。次の (6) は実例であるが、ここでの例のように日本語ではドイツ語とは異なる格の枠組みで文を構成するか、あるいは異なる述語を選択する必要がある (例えば「服でいっぱいだ」のように)。以下、用例の強調はすべて本稿の筆者による。

- (6) a. *Der ganze Schrank hängt voller Kleider.* 〈\*たんす全体が服でいっぱい掛かっている〉 (U. Johnson, *Das dritte Buch über Achim*)  
b. 洋服箆箆いっぱいぎっしり服がかかっている。(藤本淳雄訳)

以上は主語交替と呼ぶことのできる例であるが、目的語交替でも同様の議論が可能であろう (例: *Heu auf den Wagen laden* 〈干し草を車に積む〉と *den Wagen mit Heu beladen* 〈\*車を干し草で積む〉)。<sup>12</sup> このような交替がなぜ可能なか/不可能なのかというのは大変興味深い問題である。この問いに対し、成田氏の論考では、ドイツ語の構文が「注視点」(どこを見るか)と密接に関連しているのに対し、日本語の構文は「視座」(どこから見るか)と密接に関連しているからではないかという指摘がある (例えば成田 1995, 2004)。つまり、ドイツ語では事態の参与者のいずれを注視点とするのかという選択がより関与的であり、それにより図・地の反転が生じやすいというわけである。この指摘は、事態把握をめぐる他の現象とも整合性があり、示唆に富むものである。<sup>13</sup>

なお Langacker は焦点化のもとでメタファーも取り上げている。<sup>14</sup> メタファーは語義を拡張するものではなく、ある領域 (起点領域) から別の領域 (目標領域) へといわば飛躍するものである (この表現自体がメタファーである)。次の例では「ぬか」を「ブラシ」にたとえているが、「ブラシ」の語義を「ぬか」が含まれるほど拡張しようとするのは明らかに無理がある。Langacker の説明では、起点領域が目標領域の背景として機能しているとされる。

<sup>12</sup> 主語交替・目的語交替は日本語でも可能な場合があるが (例: 「ペンキを壁に塗る」と「壁をペンキで塗る」)、概して日本語の方が制限が強いと言えるだろう。

<sup>13</sup> 例えば、ドイツ語や英語などの欧米言語では、事態の外に視座を置いた客観的な事態把握が好まれるという指摘があるが、対象から遠い、俯瞰的な視座を取るならば、注視点の切り替えは相対的に容易なものとなるだろう。成田 (2009: 412) にも同様の趣旨の考察がある。

<sup>14</sup> ただし、Langacker の認知文法においてメタファーや後述するメトニミーが目立った形で取り上げられることは実際にはあまりない。瀬戸 (2002) にその理由について解説がある。

- (7) Die Kleie wirkt als regelrechte Darmbürste. 〈ぬかはまさに腸のブラシとして働く〉 (Ickler 1997: 44)

一般に、メタファーの起点領域は目標領域よりも具体性が高く、直接的な身体経験に基づいているとされるが、ここでの「ブラシ」は、「ぬか」を理解する際の概念的な背景として機能していると思われ得るだろう。

### 2.3 際立ち (*prominence*)

「際立ち<sup>15</sup>」で問題となるのは、事態を構成するどの要素を最も際立ったものとして捉えるのか、言い換えるとどの要素に最も注意を払うのかという選択である。先の注で述べた通り Langacker は前節の焦点化をこの際立ちの一種であるとしている (Langacker 2007 では際立ちのみが取り上げられている)。ここでは一点だけ触れておくと、Langacker は際立ちのもとでメトニミーに言及している。そこでは「教会」の例が挙げられているが、ドイツ語でも *eine Kirche bauen* 〈教会を建てる〉と言えば「建物」という側面が際立つし、*einer Kirche angehören* 〈教会に属する〉と言えば「組織」としての側面が際立つことになる。この場合日本語も同様である。

### 2.4 視点 (*perspective*)

「視点<sup>16</sup>」の問題は、事態把握の諸要素の中でもとりわけ日本人研究者により度々取り上げられてきた。一般に「主観的」事態把握と呼ばれる視点の取り方が、広範に日本語を特徴づけるものであるからである。この場合の「視点」とは、対象や事象を「どこから見るのか」という「参照点」ないし「視座」(成田 1995) のことである。Langacker は *vantage point* という言い方をしている。<sup>17</sup>

ドイツ語では、*her* 〈こちらへ〉や *hin* 〈あちらへ〉など直示表現の使用を視点との関連で問題にすることができるが、日独対照の観点からすると「主観性」、「客観性」の問題の方が射程が広い。「主観的」(*subjective*) な把握とは、概念化者(つまり話し手)が明確に言語化されないまま、暗示的に、ある対象・事象に属するものとして描写される場合のことである。一方「客観的」(*objective*) な描写とは、ある対象・事象が、注意の向く対象として明示的に取り出され描写される場合のことを言う (Langacker 2007: 436f., Smirnova 2020: 69)。この場合の主観性、客観性は程度問題であるとされ、「最大限に主観的」、「最大限に客観的」といった言い方もなされる。話し手は、自らが概念化を行う主体であり、多くの場合明示的には言語化されないため、原則として主観的に把握される。しかしながら、概念化され、例えば代名詞 (*ich* 〈私〉, *wir* 〈私たち〉) の形で、客観的に言語化されることもある (認知文法では比喩的に「舞台上に現れる／現れない」と表現されることもある)。

- (8) a. Es ist schön hier! 〈ここは美しい〉

<sup>15</sup> Smirnova (2020) では *Prominenz* というドイツ語が当てられている。また Langacker 自身は *salience* も言い換え可能な語として用いているが、こちらは Smirnova (2020) では *Salienz* と訳されている。

<sup>16</sup> Smirnova (2020) では *Perspektive* というドイツ語が当てられている。

<sup>17</sup> Langacker (2008) の日本語訳では「立脚点」と訳されている。Smirnova (2020) は *Gesichtspunkt* 〈観点〉と訳している。

- b. *Ich finde es schön hier!* 〈私はここは美しいと思う〉 (Smirnova 2020: 70)

上例 (8a) で状況を評価しているのは明らかに話し手であるが、話し手自身は言語化されておらず、従って主観的に把握されているとされる。一方、(8b) の場合であれば、話し手が *ich* 〈私〉という形で明示化されており、客観的に把握されている。この問題についてはすでにさまざまに論じられているため、本稿ではこれ以上立ち入らない (成田 2009, 池上 2020 などを参照)。

## 2.5 動態性 (dynamicity)

「動態性<sup>18</sup>」——と仮に訳しておくが——とは、時間の処理の仕方と関係する事態把握のことである。Langacker は、語順の問題に加え、メンタル・スキヤニングの問題を論じている。まず語順について、言語表現は特定の順序で実現され、それにより想起される概念内容も特定の順序で処理されていくため、最終的に意味にも影響すると説明される。

- (9) a. *Sie stritt mit ihrem Zahnarzt über Religion.* 〈彼女は歯医者と宗教について言い争った〉  
b. *Sie stritt über Religion mit ihrem Zahnarzt.* 〈彼女は宗教について歯医者と言い争った〉  
(Smirnova 2020: 70)

次にメンタル・スキヤニングに関わる問題としては、例えば同じ道を指して、*Aufstieg* 〈上り坂〉と言ったり、*Abstieg* 〈下り坂〉と言ったりするような場合が挙げられる。認知文法では、事態の連続性を知覚する心的操作について、特に順次的 (*sequential*) なスキヤニングと総括的 (*summary*) なスキヤニングを区分するが、この区分は品詞の説明にも用いられ、典型的には、動詞は前者の、名詞は後者のスキヤニングを前提としているとされる (例えば *tanzen* 〈踊る〉と *Tanz* 〈踊り〉の対立を参照)。対照研究の観点からは、次のような日独語の対応が興味深い現象として指摘できるだろう。

- (10) a. *Den alten Heilandt stimmte Schugger Leos Anblick heiter.* 〈年老いたハイラントをシュガー・レオの眺めが快活にした〉 (G. Grass, *Die Blechtrommel*)  
b. ハイラント老人はシュガー・レオの姿をみて、快活になった。(高本研一訳)  
(11) a. *僕が眠っているのを見ていてほしいんだ。* (村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)  
b. *Ich möchte gerne, daß du meinen Schlaf bewachst.* 〈君に僕の眠りを見ていてほしい〉 (A. Artmanns/J. Stalph 訳)

ドイツ語における名詞を用いたモノ的な表現に対し、日本語では動詞を用いたコト的な表現が自然に対応するということがよく見られる。

<sup>18</sup> ここでは Langacker (2007) による術語を取り上げたが、Langacker (2008) の「事態把握」の章では「時間的側面」(*temporal dimension*) として「視点」のもとで補足的に論じられている。なお、Smirnova (2020) は *dynamicity* に対し *Dynamizität* というドイツ語を当てている。

### 3. 力動性 (force dynamics)

最もよく知られた日英対照研究の一つに池上 (1981) がある。概略, ある出来事が言語化される場合, その出来事に関与する特定の個体に注目し, その個体を際立たせる形で表現を構成するのか (「する」的な言語, 例えば英語) と, 関与する個体があっても, 全体に含め, 埋没させるような形で表現を構成するのか (「なる」的な言語, 例えば日本語) という対立を論じたものである。池上 (1981) は広範な事例を取り上げているが, 例えば次のような例が該当する。

- (12) a. カードが落ちたわ。(映画『千と千尋の神隠し』)  
b. *Du hast dein Kärtchen verloren.* 〈あなたはカードを落とした〉(ドイツ語訳)

このような事態の捉え方の差はどのように考えればよいであろうか。可能性としては, 「あなた」を視野に捉えているかどうかという点で, 際立ちないし視点の問題として扱うことが考えられる。<sup>19</sup> それとは別に Talmy (2000) の「力動性<sup>20</sup>」の考え方も有効かもしれない。Talmy も Langacker と同様に事態把握に関わる現象をさまざまに考察しているが, Langacker に見られない点としてこの力動性を指摘することができるだろう。Talmy は, 使役に関わる現象を中心に, 個体が持つ力と力のせめぎ合いという力動性がどのように言語化に関わっているかを考察している。次のような例が出発点となる。

- (13) a. *Fred zerbrach das Fenster.* 〈フレッドが窓を壊した〉  
b. *Der Stein zerbrach das Fenster.* 〈石が窓を壊した〉  
c. *Fred zerbrach das Fenster mit einem Stein.* 〈フレッドが石で窓を壊した〉  
d. *Das Fenster zerbrach.* 〈窓が壊れた〉(Tomasello 2006: 197)

これらの例では, 動作主から被動作主に対して物理的な力が加わり変化が生じるという典型的な使役の状況がいくつかのバリエーションとともに描写されている。Talmy はさらに典型性の落ちる事例についてもモデルの拡張という観点から説明する。先の (12) に戻ると, 統語的には項構造の観点から分析可能な事例ではあるが, 意味的な観点からは捉えの問題として考察すべきものである。

なおこの関連で, 好まれるヴォイスという問題も, 今後対照的観点から解明されなければならない課題の一つとなろう。ここでは問題を提起することしかできないが, 次の例において日本語では「(サ)セル」「(ラ)レル」という要素が含まれているのに対し, ドイツ語訳では含まれていない。

- (14) a. 狂人たちは皆同じように鼠色の着物を着せられていた。(芥川龍之介「或阿呆の一生」)  
b. *Die Verrückten trugen alle dieselben grauen Kleider.* 〈狂人たちは皆同じグレーの服を着

<sup>19</sup> 池上氏自身も述べているが, 「する」と「なる」の対立は, 本質的なところでは 2.4 で取り上げた「視点」の問題に還元できると考えられる (Ikegami 2007: Nachwort)。なお, 本稿は関連する問題も含め広く取り上げることを趣旨としている。

<sup>20</sup> Smirnova (2020) では *Kräfte*dynamik というドイツ語が当てられている。

ていた) (O. Putz 訳)

#### 4. 観点化 (Aspektualisierung)

本節では専門語 (Fachsprachen) 研究において指摘されている「観点化」と呼ばれる現象を見てみたい。<sup>21</sup> これも視点に関わる現象の一つである。専門領域で扱われる対象には、日常レベルではその存在すら確認できないものがあるのも事実であるが (例えば Atomkerne (原子核) や Gene (遺伝子)), 多くの領域では必ずしもそうではない。そのような場合に重要なのは、専門家は、いわゆる素人とは異なる特定の観点 (Aspekt) から対象や事象を捉えているということである。

Wasser (水) の例で見てみよう。Wasser (水) は日常的に身近な対象であり、一般人もその性質や用途について多くのことを知っている。しかしながらその同じ対象を、化学者は化学的な観点から、つまり化学の領域で確立されたモデルや方法でもって観察する。その際、他の観点——社会学的な観点や宗教的な観点など——は考慮されない。仮に観点を混同するようなことがあれば、違和感や滑稽さを生じさせることになる。以上のことが意味するのは、対象そのものが専門領域を作り出すのではなく、人によって選ばれた、特定の観点こそが専門領域を作り出すということである (Ickler 1997: 14)。

観点化のもたらすさまざまな捉えについて日常語との対比で確認しておこう。まず Wasser (水) は一般的にはおそらく最も典型的な液体である。ところが物理学の観点からは、その固化の性質から「異常液体」の一つとなる。<sup>22</sup> Salz (塩) は、一般的には塩辛い味こそがその特徴であろう。しかし、化学的にはイオン結合や結晶生成の様相によって規定されることになる。味は問題とならない。Metall (金属) も、日常的には視覚や触覚に基づき、光沢のある、固い (場合によっては柔らかい) 物質を想起させる。しかし、化学的な観点からは酸化などの特徴によって定義づけられる。日常的には貴金属ほど金属らしい金属ということになるかもしれないが、酸化反応の観点から見れば、卑金属ほど金属らしい金属である。

このようなことは自然科学の領域に限られない。Tier (動物) は法律上 Sache (物) の扱いとなるし、<sup>23</sup> 人も出生前は Mensch (人) としては扱われない。<sup>24</sup> Verletzung (外傷) という語からはふつう体表面の負傷を思い浮かべるが、医学的、法的には、有毒ガスなど化学的要因によるものや、電気的要因、放射線的要因によるものも含まれる。また心理的なものも (seelische) Verletzung ((心的) 外傷) と呼ばれる。<sup>25</sup> ちなみにドイツ語の Verletzung に関して言えば、権利の「侵害」にも用いられ、「被侵害者」も法律上 Verletzte(r) と呼ばれる。つまり、専門語と言っても多義の状況は日独語間で異なっていることが分かる。最後は数学からの例だが、Kurve (曲線) と言えば、曲がった線であることは疑いの余地がないように思えるが、数学では Gerade (直線) も Kurve (曲線) の一つと考える。<sup>26</sup> いずれも観点 (見方) の問題である。

<sup>21</sup> 本節の議論は Ickler (1997) に依拠している。用例もほぼ同書から取った。

<sup>22</sup> 「正常」な物質は液体が固体に変化する際に体積が減少するが、「異常」液体では増加する。例えばウィキペディアの「異常液体」の項目を参照 (最終閲覧: 2022.2.21)。

<sup>23</sup> 日本では民法 85 条の規定「この法律において、『物』とは、有体物をいう」による。https://www.fushimisogo.jp/ペットと法①—ペットの法律上の地位/ (最終閲覧: 2022.2.21)

<sup>24</sup> http://yuigonsouzoku.jp/kihonyougo/hito.html (最終閲覧: 2022.2.21)

<sup>25</sup> ギリシャ語由来の Trauma (トラウマ) も用いられるが、医学用語としての Trauma は Verletzung (外傷) と同義である。

<sup>26</sup> ウィキペディア「曲線」の項を参照 (最終閲覧: 2022.2.21)。

この関連で次のような現象も指摘しておいてよいだろう。専門語の世界では価値の「中立化」(Neutralisation) が起こることがある。例えば、直線の「傾き」は、ドイツ語では上っていても下っていても *Steigung* (直訳すると「上り」と呼ばれる。なお一般的には水平な状態は「傾いている」とは言わないが、数学では *Steigung 0* (傾き 0) として *Steigung* (傾き) に含まれる。ほかに経済用語で *Nullwachstum* (ゼロ成長) や *Minuswachstum* (マイナス成長) という言い方がなされるのも同様の現象である。いずれも広い意味で物事の見方の問題が関わっている。専門語は現代語を特徴づける極めて重要な位置を占めているが、観点化は言語一般に該当する普遍的な側面の比重が大きいのか、あるいは個別言語的な側面もあるのか、あるとしたら一般化は可能なのかなど、現時点では未解明の部分も多い。今後研究を進めていく必要がある。

## 5. 文化心理学の知見から

捉えの問題は当然人の心の働きと関係している。ことばによる捉えの問題が特に認知言語学と呼ばれる分野で大きく取り上げられるのも理由のあるところであろう。本節ではさらに隣接領域に目を向けてみたい。

心と文化の関係を研究する文化心理学と呼ばれる研究分野がある。生物としての人間に普遍的な心の働きの存在を踏まえた上で、人の心理プロセスの文化差に着目した研究が行われている (増田/山岸 2010)。その内容は多岐にわたるが、ここでは増田と Nisbett らによる注意配分の文化差の研究を取り上げてみたい (Nisbett 2003, 増田 2010)。Nisbett を中心とする研究グループは、東アジア文化圏で特徴的な思考様式を「包括的思考」(*holistic thought*)、欧米文化圏で特徴的な思考様式を「分析的思考」(*analytic thought*) というキーワードでまとめ、そうした思考様式が、物事の捉え方に影響を及ぼしていると主張している。心理学実験の一例として増田が Nisbett とともに行ったものがある。日本人やアメリカ人の学生に魚と水生生物のアニメーション (図 1) を見てもらい、その後あらためて何を見たかを説明してもらおうというものである。

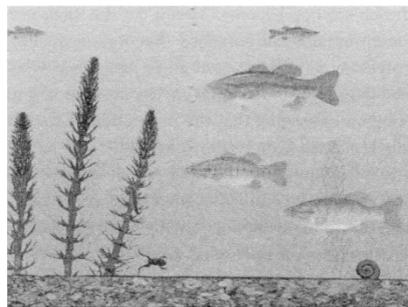


図 1：再生課題の例 (Nisbett 2003: 91 より)

その結果は、「アメリカ人の学生は、中心で目立った魚について言及する傾向があるのに対し、日本人は画面全体の状況を説明する傾向がある」(増田 2010: 69) というものであった。例えば、アメリカ人であれば「三匹の魚がいて一匹は大きかった」「下の方の魚は赤いひれだった」、一方日本人では「藻などが生えている池のようなところで、魚が三匹泳いでいます」というのが典型的な説明となる (増田 2010: 6)。アメリカ人の説明は、目立っている対象にいわばピンポイントで焦点を当てているのに対し、日本人の説明は全体の状況、つまり背景や関係性にも注意を向けるというものである。

ここまで何度か触れてきたように、成田氏の論考ではドイツ語の「注視点」志向性についての言及が見られる。例えばドイツ語の特徴として「文脈や状況に応じて状況の捉え方を変えらるとしたら、事態参加者のいずれを注視点とするかという選択の方が関与的 (relevant) となりやすい」(成田 2009: 412) という指摘には、上の実験結果との間に興味深い平行性が見られる。言うまでもなく、ここで取り上げた内容は池上 (1981) との親和性も高い。<sup>27</sup>

## 6. おわりに

心理学者の故河合隼雄氏は、次の引用に見るように現実 (あるいは人間の意識) が多層的であることを再三強調している。

心理療法家は、「唯一の正しい現実」が存在すると考えるよりは、現実を人間がどう認知するか、そして、そのような認知の仕方は、その人にとってどのような意味をもち、周囲の人々とのどのように関係するか、ということに関心を払うということになる。そこで、そのような「現実」を認知する人間の意識ということを考えて、人間の意識は層構造をもつと考える方が、その現実認識の在り方を考える上で好都合である。(河合 1992: 35)

この引用は神経症的な症状を念頭に書かれたものだが、ここでも人の捉えあるいは視点の問題が絡んでいることに気づかされる。人はなぜわざわざそのような「不幸」を引き受けてまでも、複数の視点を持つ道を選んだのであろうか。単に生き延びるという目的のためだけであればクラゲのようなストラテジーを選んでもよかつたわけである (日高 2008)。冒頭で取り上げた Tomasello は次のように述べている。

ことばがこのようになっている唯一の理由は、人々がさまざまな物事について、さまざまなコミュニケーション上の環境の中で、さまざまな観点からコミュニケーションする必要があるからである。そうでなければ、どんな対象や事象も [...] ただ一つの真の名称を持つ、そしてただそれだけ、ということになっていただろう。(Tomasello 1999: 119)

Tomasello の説明は複数の視点を持つことのメリットを述べているが、根源的な答えにはなっていない。実際のところ、人という種がそもそもなぜ複数の視点を持つという、他の種にはないような生存のストラテジーを取るに至ったかを説明するのは困難であろう。いずれにせよ、そのことが——つまり複数の選択肢を持つに至ったことが——ある意味で、人の幸福の始まりでもあり、不幸の始まりでもあったわけである。

さて、本稿ではここまでことばによる捉えの問題を概観してきた。Langacker による事態把握についての考察を出発点としたが、それ以外にも、ことばにはさまざまな捉えないし視点が入り込んでいることが確認できたと思う。また、捉えの問題は、ことばという領域を超えて、人の心の問題ともつながっている。成田氏の一連の論考からも窺える通り、捉えの問題について考えることは、ドイツ語とは何か、日本語とは何かという問題を考えることであり、そしてそ

---

<sup>27</sup> このように文化心理学からの知見は極めて示唆に富み、特に対照言語学が参考にできる部分も大きいように思える。一方で、ここまでの言語研究のデータと整合性が取れていないような記述が見受けられるのも確かだ、今後のきめ細かな検証ないし共同作業が待たれるところである。

れが最終的にことばとは何か、人間とは何かという、興味深く、壮大なテーマへとつながっていることは確かである。

## 文献

- 浜田寿美男 (1999): 『「私」とは何か』 講談社.
- 日高敏隆 (2008): 『動物という文化』 ランダムハウス講談社.
- Ickler, Theodor (1984): *Deutsch als Fremdsprache*. Tübingen: Niemeyer.
- Ickler, Theodor (1997): *Die Disziplinierung der Sprache*. Tübingen: Narr.
- 池上嘉彦 (1981 [2007]): 『〈する〉と〈なる〉の言語学』 大修館書店. [Dt. *Sprachwissenschaft des Tuns und des Werdens*. Berlin: Lit. 2007]
- 池上嘉彦 (2019): 「認知言語学と記号論」 辻幸夫ほか (編): 『認知言語学大辞典』 朝倉書店, 2-18.
- 池上嘉彦 (2020): 「事態把握」 池上嘉彦／山梨正明 (編): 『認知言語学Ⅱ』 ひつじ書房, 1-22.
- 河合隼雄 (1992): 『心理療法序説』 岩波書店.
- Langacker, Ronald W. (2007): Cognitive Grammar. In: Geeraerts, Dirk/Cuyckens, Hubert (eds.): *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. Oxford: Oxford UP, 421-462.
- Langacker, Ronald W. (2008): *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford UP. [和訳: 『認知文法論序説』 研究社. 2011]
- 増田貴彦 (2010): 『ボスだけを見る欧米人 みんなの顔まで見る日本人』 講談社.
- 増田貴彦／山岸俊男 (2010): 『文化心理学』 (上・下) 培風館.
- 成田節 (1995): 「„Perspektive“ の概念について——構文研究の観点から」 『大阪市立大学人文研究』 47 (10), 161-178.
- 成田節 (2002): 「結合価と構文——日独対照の観点から」 『語学研究所論集』 7, 1-22.
- 成田節 (2004): 「文構造と動詞——日本語と対照しながらドイツ語の特徴を探る」 河崎靖ほか (編): 『ドイツ語学の諸相』 郁文堂, 75-88.
- 成田節 (2005): 「ドイツ語の be-動詞表現——対格化をめぐる」 『言語情報学研究報告』 7, 361-381.
- 成田節 (2009): 「視点と日独語の表現——翻訳の対照を手がかりに」 『東京外国語大学論集』 79, 399-414.
- 成田節 (2018): 「ドイツ語の受動文——日本語の「受け身」とどう違うか」 『エネルギー』 43, 19-40.
- Nisbett, Richard E. (2003): *The Geography of Thought*. New York: Free Press.
- 瀬戸賢一 (2002): 「メタファー研究の系譜」 『言語』 7月号, 16-23.
- Smirnova, Elena (2020): Kognitive Semantik. In: Hagemann, Jörg/ Staffeldt, Sven (Hg.): *Semantiktheorien II*. Tübingen: Stauffenburg, 57-83.
- Talmy, Leonard (2000): *Toward a Cognitive Semantics. Vol. 1*. Cambridge: MIT Press.
- Tomasello, Michael (1999 [2006]): *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, Mass.: Harvard UP. [Dt. *Die kulturelle Entwicklung des menschlichen Denkens*. Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 2006]
- Uexküll, Jakob von (1970 [1934; 1940]): *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen; Bedeutungslehre*. Frankfurt am Main: Fischer.